

史談

2010 (H22) 5・15

■ 平成22年度、役員会報告

さる5月7日、中央公民館で役員会が開かれました。その席で今年度の総会を5月29日(土)に開催、平成21年度の事業と決算の報告、22年度の事業計画と予算案、更に役員改選の件を審議していただくことになりました。

ぜひご出席の上、これからの史談会のあり方、運営の方法や事業の内容全般について、忌憚のない意見を発表して下さるようお願いいたします。

なお当日、年会費3000円を納入していただくことになっていますので、お忘れなく。

総会后、「講話」を予定しており、今回は樋口利夫氏に「五・一五事件の三上卓」という話をお聞きする予定です。この件については後の記事を参考にしてください。

■ 天候不順

この春は近年にない天候不順だといわれています。蕾もふくらみ、もうじき桜の花が咲くかと思ったら4月17日には雪が降りました。みな驚きましたが、そうした中をバスに乗って桜の花見にきた人もいました。

また、連休に遊びにきた子どもらが「寒い」といっては電気ストーブをつけたかと思うと、2日ほどたったら今度は「暑い」といって「ソーメンがうまい」という具合です。寒暖の差が大きいことに体がついてゆけず、鼻水が止まりません。

心配なのは野菜の生育の遅れにみられるような農業への影響です。なにせ「おてんとう様」が唯一の頼りなのでから……。もっとも季節の変化にそれぞれの商売が関係することはみな同じでしょうが、先ごろ神仏に「天下泰平」や「平穏無事」を祈ったばかりなのに、ちと約束が違いませんか、と小言のひとつも言いたくなる心境です。これからの天候が「平年並み」であってほしいものです。(草)

■ 五・一五事件の首謀者

三上卓の書 1

樋口 利夫

五・一五事件に関与した三上卓の書、数点を長井市五十川の生家・鈴木孝吉宅と小生の兄弟が所持している。

昭和四十年代のことであるが、三上卓が小生の生家に数回、来宅したことがあった。この人は多くの日本人の脳裡からはおおかた忘れられている人物であるかも知れない。

彼は世にいう昭和初期、世の注目を集めた「五・一五事件」といわれるクーデターを引き起こした海軍の一士官であった。この事件は、志を同じくする海軍や陸軍の若い士官たちと謀って官邸や銀行、変電所などを襲い、当時の首相であった犬養毅を撃ち、政治の刷新を計ろうとしたものであった。

このクーデターは初期の目的を達成することなく、終息することになった。事の善悪や理非曲直が充分に問われぬままであったように思う。この事件を止むに止まれぬ、義挙であったとする層、全否定をする層の両論があった筈である。

当然の事として、法の裁きで関係者は投獄の戒めを受け、刑に服することになった。時、あたかも、軍による大陸進出、満州建国、対中国情勢の悪化と布告のない戦火が勃発し、世界最終戦争への幻想など、政界の対立によって折角の政党政治が終焉した。さらに農村経済の極度の逼迫による身売り事件、労農集団と資本の対立による暴動や陰悪な争議が頻繁に起こるなど、世情は緊迫の一途を辿るばかりであった。

このクーデターも突然生起したものではなく、元を正せば同根異曲で、当時の世情が見えている。

なおこのたびは、所持する書の目録の提示にこどもておくことにしたい。

○色紙 1. 武士道は死ぬことと見つけたり
(葉隠)

2. 四時移万物育

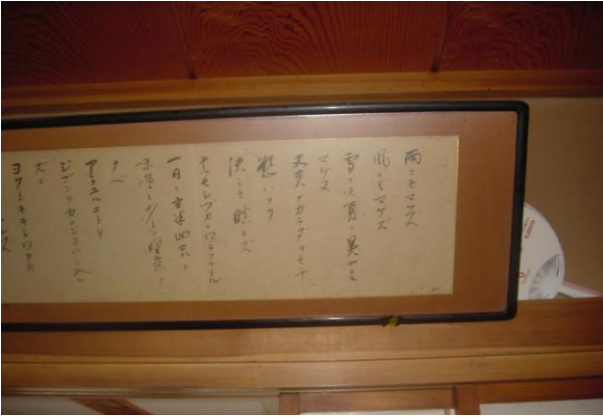
3. 言の葉ハ終りぬ梅花凜々と

○掛軸 1. 無位真人(臨濟禅・蕉窓夜話)

2. 心身脱落(曹洞禅・只管打座)

3. 雨欲来風満楼

- 短冊 1. 天蒼く満地の雪の光り充つ
2. 道冷えて春蘭の花芽を瞞む
○横額 1. 宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」
の九点である。



(注) 今回、所有者の了解のもとに、上記の三上卓の書を一挙公開の予定です。またとない機会ですので、ぜひご覧ください。同時にこれらの書についての情報や、こうした展示物・内容などについて御意見を聞かせてください。(川)

■ 陸軍中尉「梅村忠太郎」のこと

時代の変化は激しく、長井市内でも80歳を越えた人でなければこの名前を聞いてもピンとこなくなかったのは、自然の成り行きだろうか。すでに戦後生まれが多数を占めるようになり、同時に先の戦争の記憶も遺族や高齢者だけのかすかなものになりつつある。

特に昭和6年の満州事変以降、10年代に入って日本が中国に戦争を仕掛け、戦火を拡大しながら大陸へ進出していった時代のことは、私たちの頭の中ではほぼ空白である。その間、数多くの人たちが無謀な戦争の犠牲になった。

「梅村忠太郎」もその一人である。大正5年の11月、長井市生まれ。昭和12年召集。13年、抜粋されて豊橋歩兵教導学校に入学。卒業後、原隊復帰。7月、歩兵少尉に任官。命令により南支方面に向かう。その後、武漢攻略戦に参加、連日悪戦苦闘の中で重症を負い、後方に護送される船中で9月30日死亡。23歳だった。

ただ、数ある戦死者の中でも忠太郎の場合は他の戦死者と大きく違った点があった。それは当時

従軍記者として派遣されていた作家の林芙美子によって、息を引き取る最後の様子が克明につづられ、実名入りで新聞や雑誌に発表されたことや、帰国した芙美子が講演会やラジオで話したことで、全国にその名が知れ渡ったことである。むろん遺族には励ましや感動したという便りが届いたことはいままでのない。

翌14年の春、遺骨が帰ってきた時には町葬が営まれ、当時の町長・桑島忠一が葬儀委員長となり、弔詞を読んでいる。さらに秋元南城が「噫 梅村中尉」という台本を書き、小学校の体育館で自ら琵琶の追悼演奏をしたという。

時局とはいえ、駅前の菓子問屋の長男・梅村忠太郎は、実直で秀でた若者であるがゆえに、軍の幹部をめざした。さらに選ばれて中国の戦地におもむき、激戦で負傷し、移動の船の中で命を落としたのである。意識も朦朧として生と死の間をさまよう忠太郎の最後をみとったのは、偶然、同じ船に乗り合わせた林芙美子だった。芙美子は船内で兵士が死んでいくありさまを、感情を交えず、むしろ淡々と書き進めている。今の私たちはそれを『北岸部隊』で読むことができる。

むろんこれらの作品は「非戦」や「厭戦」の気分を特に醸しだしたりはしていないが、結果としては戦争の虚しさや兵隊のやり場のない気持ちをストレートに伝えているといえよう。



今から70年ほど前、この国はどんな状態だったのか。国の内外で何が起り、それはこの国のありかたにどんな影響を及ぼしたのか。

すでにここ30年ほど前のことですらおぼろげになりつつある昨今、歴史を学びなおすことの必要性を改めて感じているところである。(川)